

日本におけるジョージ・エリオット文献書誌：明治・大正期（新聞・雑誌編 [続]）

A Bibliography of George Eliot: Newspapers and Periodicals Published in Japan during the Meiji and Taisho Eras (Sequel)

大嶋 浩*
OSHIMA Hiroshi

This bibliography is a sequel to "A Bibliography of George Eliot: Newspapers and Periodicals Published in Japan during the Meiji and Taisho Eras (1868-1926)," which appeared in the previous issue. It contains the entries for the period from 1897 to 1926. The entries are divided according to the year of publication and are presented in chronological order.

This is not a complete bibliography. I apologize for any inadvertent omissions and hope that further research will provide a comprehensive bibliography.

キーワード：書誌，ジョージ・エリオット，明治時代，大正時代，新聞と雑誌

Key words : bibliography, George Eliot, Meiji and Taisho eras, newspapers and periodicals

I はじめに

本書誌は、前号に掲載した「日本におけるジョージ・エリオット文献書誌：明治・大正期（新聞・雑誌編）」の続きである。掲載頁数の関係上、前号において発表できなかった明治31年から大正時代までを掲載している。

各項目は年代順に整理されている。ただし、連載ものに関しては、初出を基準として一括して整理し、その細目は破線（----）で区切って明示されている。そのため、連載が昭和期に及んでいる場合、その連載は昭和期まで一括して整理されている。

原則としてできるだけ発表当時の表記に準じ、旧字体を用いているが、一部新字体を採用したところもある。

*印を付したものは、浅野の書誌（浅野福治、「日本にお

けるジョージ・エリオット一書誌つきー」、『学苑』424 [1975]: 162-79)に出ているが、未確認のものであることを示している。

なお、本書誌作成にあって参考にした文献に関しては、前号掲載の「日本におけるジョージ・エリオット文献書誌：明治・大正期（新聞・雑誌編）」の参考文献欄を参照していただきたい。

まだ多くの遺漏があることと思う。本書誌をより完全なものにするために、情報等をお寄せいただければ幸いです。本書誌を作成するにあたっては、文献資料の調査・収集等において兵庫教育大学附属図書館の情報サービス係には特にお世話になった。ここに記して感謝する。

II 明治・大正期の書誌（新聞・雑誌関係 [明治31年以降]）

発行年月日	著者名・ 訳者名等	タイトル	雑誌・ 新聞名	発行所，頁等	備考（エリオットへの言及箇所等）
1897.04. 明治 30	戸川秋骨	英文學と伊太利文 學との関係	太陽	第三巻第七號号， pp.112-28. (海外文壇)	エリオットへの言及はp.116.
1897.04.03 明治 30	久米桂一郎・ フェルナン ブルンチェー ル	芸術に於ける自然 主義と理想主義の 別	國民之友	第參百四拾貳號， pp.14-19. (特別寄書)	フェルナン， ブリュンチェールの「時論新 評」中の一篇の翻訳；エリオットへの言及 はp.18；「吾人が認むる眞の自然派とは， 阿蘭陀畫家， 西班牙畫派中多くの名家， 英 國文學一部の小説家， 其首位に數ふべきは シャルハ， チッケンス又シャルロット， プ ロンテの如き， 殊にジオルジュ， エリオッ トの類， ……」

1897.04.03	明治 30		文学に於けるヴ クトリヤ時代	國民之友	第參百四拾貳號, pp.39-40. (海外思潮)	「英國『嘉言』雜誌」掲載の「アンドリュ ー, ラング氏」(p.39)の論文を紹介したもの ; エリオットへの言及はp.40:「小説界に到 ては, ヴクトリヤ時代の小説は, 優にエ リザベス朝の戯曲と併稱することを得べし 。現代にはヅッケンス, サツカレー, ジョ ルヂ, エリオット, チャーロット, ブロン テー等の大家星の如く輝けり。……ジ ョオチ ^[ママ] , エリオットと及チア ーロット, ブロンテーの作中には獨創 的不朽的の分子あり。」
1897.04.15	明治 30		文學上のヴ クトリア時代	大日本	第一卷第七號, p.53. (評論之 評論)	一流の小説家としてエリオットに言及
1897.06.27	明治 30	(内村鑑三)	Literature of the Victorian. I.	萬朝報 (THE YORODZU CHOHO)	第千三百七十九號, p.2. (英 文欄; English Department— No.444)	『内村鑑三全集 4』(岩波書店, 1981.06. 24)の「解題」(亀井俊介)によれば, 「Richard le Gallienneの記事に従って, ヴ ィクトリア朝のイギリス文学の展開を紹 介したもの。大部分が引用からなるほか, 内容的にも文体的にも内村鑑三を思わせ る要素は少ない。旧全集には収録されて いる。」(pp.458-59)とある; 記載は復 刻版(『萬朝報 19』(日本図書センタ ー, 1985.01.25)に基づく
1897.06.29			Literature of the Victorian. II.		第千三百八十號, p.2. (英文 欄; English Department— No.445)	"In 1858 came 'George Eliot' with 'Scenes from Clerical Life' [sic] ...; 1859 was another great year, 'Adam Bede,'"
1897.06.30			Literature of the Victorian. III.		第千三百八十一號, p.2. (英 文欄; English Department— No.446)	
1897.07.	明治 30		井クトリア ^[ママ] 女 皇愛讀の書	太陽	第三卷第拾五號, p.254. (海 外)	
1897.09.10	明治 30	八面樓主人	鑑三内村氏の『愛 吟』	國民之友	第參百六拾壹號, p.121-22. (批評)	エリオットへの言及はp.121.
1897.09.10	明治 30	上田敏	六十年前の英文壇	帝國文學	第三卷第九, pp.91-92. (「雜 録」中の「海外騷壇」の項)	エリオットへの言及はp.91; 訂正等を加 えて『最近海外文學』(交友館, 1901.12.03) に再録
1897.10.03	明治 30	岡倉覺三, 呉文聰, 松 村介石	文學局外觀	早稻田文 學	第壹號, pp.1-7. (雜録)	
1897.11.03		志賀重昂, 尺秀三郎			第貳號, pp.37-41. (雜録)	
1897.12.03		内村鑑三, 三上參次			第參號, pp.69-74. (雜録)	
1898.01.03	明治 31	金子堅太郎, 戸川残花, 大西祝			第四號, pp.102-09. (雜録)	エリオットへの言及はp.104 (金子堅太郎 氏)
1898.02.03		尾崎行雄			第五號, pp.129-37. (雜録)	
1898.04.03		徳富猪一郎, 某省參事官 の夫人			第七號, pp.197-208. (雜録)	エリオットへの言及はp.203 (徳富猪一郎 氏)
1898.05.03		久津見息忠, 某實業家の 妻女, 學校 教師某の妹 女, 某富豪 の女三人			第八號, pp.235-46. (雜録)	

1898.06.03		竹越與三郎 某商家の女 某地方紳士 の妻			第九號, pp.261-65. (雜録)	
1898.01.01	明治 31	高島捨太	英文尺牘一斑 (一)	少年文集	第四卷第壹號, pp.8-13. (文 話)	エリオットへの言及はp.9.
1898.02.10			英文尺牘一斑 (二)		第四卷第貳號, pp.9-13. (文 話)	
1898.03.10			英文尺牘一斑 (三)		第四卷第參號, pp.9-14. (文 話)	
1898.04.10			英文尺牘一斑 (四)		第四卷第四號, pp.9-14. (文 話)	
1898.05.10			英文尺牘一斑 (五)		第四卷第六號, pp.9-14. (文 話)	
1898.06.10			英文尺牘一斑 (六)		第四卷第七號, pp.9-14. (文 話)	エリオットへの言及はp.11.
1898.07.10			英文尺牘一斑 (七)		第四卷第八號, pp.9-12. (文 話)	
1898.08.10			英文尺牘一斑 (八)		第四卷第九號, pp.9-13. (文 話)	
1898.02.05	明治 31		一小説家と一婦人	太陽	第四卷第參號, p.42. (時事論 評)	
1898.02.28	明治 31	(森鷗外 訳)	審美新説	めさまし 草	まきの二十六, pp.27-32.	「審美新説」は、ヨハンネス・フォルケルト (Johannes Volkelt) の「審美上時事問題 Aesthetische Zeitfragen の大意を約取したるもの」(「審美新説」, 『目さまし草』まきの三十九 [1899.09.16], p.11); 明治三十三年二月二十三日, 春陽堂から単行本『審美新説』として刊行
1898.05.20			審美新説		まきの二十八, pp.41-48.	エリオットの Adam Bede への言及 (p.48)
1898.07.08			審美新説		まきの二十九, pp.9-15.	
1898.08.19			審美新説		まきの三十, pp.14-16.	
1898.10.31			審美新説		まきの三十二, pp.1-10.	
1898.11.30			審美新説		まきの三十三, pp.1-10.	
1899.02.18	明治 32		審美新説		まきの三十五, pp.1-18.	
1899.05.31			審美新説		まきの三十七, pp.1-8.	
1899.07.31			審美新説		まきの三十八, pp.1-10.	
1899.09.16			審美新説		まきの三十九, pp.1-12.	
1898.04.03	明治 31	畠山古瓶義	英国最近の小説略 史	早稻田文 學	第七號, pp.229-33. (雜鷗)	エリオットへの言及はpp.230-31: 「ジョージ, エリオットは女性の性質及び経験を解剖し, 描寫せん為に出でたりし作家なり。……世女性の行動の活画面を見るを得たり。」
1898.05.03			英国最近の小説略 史 (承前)		第八號, pp.246-50. (雜鷗)	
1898.04.10	明治 31	戸川明三 (戸川秋骨)	英國詩壇の藝術的 趣味	帝國文學	第四卷第四十, pp.13-28. (論 説)	エリオットへの言及はp.17.
1898.04.10	明治 31	長谷川天湊	ゲッケンス	文藝俱樂部	第四第五編, pp.154-67. (東 西文豪)	エリオットへの言及はp.154: 「最近英國小説界を眺むれば, 先づ第一に大小説家として指を屈すべきはエリオット女史なるべし」
1898.07.10	明治 31		歴史小説の不振	帝國文學	第四卷第七, pp.81-82. (雜報)	エリオットへの言及はp.82.

1898.08.10	明治 31	泡鳴子(岩 野泡鳴)	「といふ」録	女學雜誌 (雑録)	第四百六拾九號, pp.24-26. (雑録)	『アダム・ビード』, リッギン, スペンサー, リウスに言及 (p.25)
1899.02.15	明治 32	内村鑑三	「英語の美」	『東京獨 立雜誌』	第貳拾貳號, pp.2-7.	エリオットへの言及はp.7:「小説を愛する 者にはヂッケンスとサツカレーと, ジョー ゼリオットとマクドナルドあり」;『外国 語之研究』(東京獨立雜誌社, 1899.05.07) に収録
1899.04.20	明治 32	ABC.	LITERARY CORNER	青年 (THE RISING GENERA TION)	Vol.II. No.1, pp.24-26..	Mr. Clement K. Shorterがvillage libraryの ために推薦した100冊の名著のなかにエリ オットの "Silas Marner" が挙げられてい る (p.26); 後続誌は『英語青年』;「ABC.」 とは内田魯庵かも知れない(内田魯庵は 『女學雜誌』, 『学燈』等において「ABC」 の筆名を使用している [『近代文学研究叢 書 第三十一巻』訂正版(昭和女子大学近 代文化研究所, 1970.03.30)の中「内田 魯庵」を見よ]
1899.05.10	明治 32	上田敏	佛文近著	帝國文學	第五卷第四, pp.125-26. (「雑 録」中の「海外騒壇」の項)	エリオットへの言及はp.126;訂正等を加え て『最近海外文學 續篇』(交友館, 1902. 03.08)に再録
1899.06.20	明治 32	ABC.	テニソン, ブラウ ニング, エリオッ ト等の逸話 (MEMORIIES OF SOMEFAMOU SAUTHORS. BY Justin McCarthy.)	青年 (THE RISING GENERA TION)	第貳卷第參號, pp.21-23; エ リオットへの言及はp.23.	「文學欄」(LITERARY CORNER)に掲載; 「ABC.」については雑誌『青年』(1899.04. 20)の備考欄を見よ
1899.06.20	明治 32	ABC.	LITERARY CORNER	青年 (THE RISING GENERA TION)	第貳卷第參號, pp.24-26; エ リオットへの言及はp.25.	「ABC.」については雑誌『青年』(1899.04. 20)の備考欄を見よ
1900.03.10	明治 33	上田敏	ラスキン逝く	帝國文學	第六卷第三, pp.100-02. (「雑 録」中の「海外騒壇」の項)	エリオットへの言及はp.100; 『定本 上 田敏全集 第三巻』(教育出版セナター, 1978.11.25) 655-56に再録
1900.06.15	明治 33	上田敏	「十九世紀」の 「第五部 文藝史」 の中の「第一章 十九世紀の英文學」 における「八 小 説家」	『太陽』 臨時増刊 『十九世 紀』	第六卷第八號, 博文館, p.181.	『定本 上田敏全集 第八巻』(1981.04. 25)に収録
1900.07.10	明治 33	上田敏	英國小説史	帝國文學	第六卷第七, pp.85-87. (「雑 録」中の「海外騒壇」の項)	井ルバア, クロックス「英國小説の發達」 (マクミラン社)の紹介文; エリオットへ の言及はpp.86, 87 (Adam Bedeに言及); 訂正等を加えて『最近海外文學 續篇』 (交友館, 1902.03.08)に再録
1901.06.12	明治 34	ジョルジ, エリオット	『ロモラ』の梗概 (一) (ジョルジ, エリオットの小説)	富永蕃江 生	『福音新報』第三百十一號, pp.8-10.	『福音新報』はキリスト教週刊紙。最初, 『福音週報』として1890年3月に創刊され たが, 1年後に『福音新報』と改題され, 以来1942年まで, 半世紀に亘って発行され た(『キリスト教新聞総覧』第7巻, 日本 図書センター, 1996, p.9.); この梗概は, 改訂を施されて, 『雪崩と百合』 (1902.05.04)と題して民友社から刊行
1901.06.19		『ロモラ』の梗概 (二)	蕃江生	『福音新報』第三百十二號, pp.7-9.		
1901.06.26		『ロモラ』の梗概 (三)		『福音新報』第三百十三號, pp.6-8.		
1901.07.03		『ロモラ』の梗概 (四)		『福音新報』第三百十四號, pp.6-8.		
1901.07.10		『ロモラ』の梗概 (五)		『福音新報』第三百十五號, pp.7-9.		
1901.07.17		『ロモラ』の梗概 (六)		『福音新報』第三百十六號, pp.6-9.		

1901.07.24			『ロモラ』の梗概 (七)		『福音新報』第三百十七號, pp.6-8.	
1901.07.31			『ロモラ』の梗概 (八)		『福音新報』第三百十八號, pp.8-10.	
1901.08.07			『ロモラ』の梗概 (九)		『福音新報』第三百十九號, pp.3, 4-6.	p.3には「前號の正誤」が4行にわたって掲載されている
1901.08.14			『ロモラ』の梗概 (十)		『福音新報』第三百二十號, pp.5-7.	
1901.08.21			『ロモラ』の梗概 (十一)		『福音新報』第三百二十一號, pp.6-8.	
1901.08.28			『ロモラ』の梗概 (十二)		『福音新報』第三百二十二號, pp.6-8.	
1901.09.04			『ロモラ』の梗概 (十三)		『福音新報』第三百二十三號, pp.9-11.	
1901.09.11			『ロモラ』の梗概 (十四)		『福音新報』第三百二十四號, pp.5-7.	
1901.09.18			『ロモラ』の梗概 (十五)		『福音新報』第三百二十五號, pp.8-10.	
1901.09.25			『ロモラ』の梗概 (十六)		『福音新報』第三百二十六號, pp.6-8.	
1901.10.02			『ロモラ』の梗概 (十七)		『福音新報』第三百二十七號, pp.10-12.	
1901.10.09			『ロモラ』の梗概 (十八)		『福音新報』第三百二十八號, pp.8-11.	
1902.01.	明治 35		十九世紀に於ける 歐米の大著述	學鐙	第五十六號, pp.11-102.	目次の表記は「十九世紀に於ける歐米の大著述に就ての諸家の答案(ABC順)」; エリオットへの言及はp.24(エリオットの署名), p.70(田中喜一が「(2)最も興味ある詩賦小説等」において「George Eliot: Romola」と「Daniel Deronda」を挙げている), p.76(田中萃一郎が「(2)最も興味ある詩賦小説等」において「George Eliot: Romola」を挙げている), p.89(上田敏が「(1)English Literature」において「George Eliot: Silas Marner」を挙げている)
1902.02.		福田徳三, 樋口秀雄, 葛岡信虎, 丸山通一			第五十七號, pp.7-26.	
1902.03.01		工學博士 大竹多氣			第五十八號, pp.7-9.	エリオットへの言及はp.8(「(二)十九世紀中の最も興味ある傑作」において「George Eliot: Adam Bede」を挙げている), 及びp.9(「エリオットの『アダム, ビード』は十八世紀の作物たるGoldsmith's "The Vicar of Wakefield" と伯仲の間にある逸品と存じ候。)
1903.10.15	明治 36	蘭蕙書屋主人	十九世紀後半藝文 年表(一)	學鐙	第七年第十號, pp.14-17.	エリオットへの言及はpp.15, 16:「イリオット "Scenes of Clerical Life.", 「イリオット "Adam Bede.", 「イリオット "Silas Marner.", 「イリオット "Romola."」
1903.11.15			十九世紀後半藝文 年表(二)		第七年第十一號, pp.21-24.	エリオットへの言及はp.23.
1903.12.15			十九世紀後半藝文 年表(三)		第七年第十二號, pp.16-18.	
1905.01.15	明治 38	夏目金之助	「カーライル博物 館」	學鐙	第九年第一號, pp.1-8.	エリオットへの言及はp.2.

1905.10.15	明治38	宮崎湖處子	女作家オーステン嬢	婦人畫報	臨時増刊貴婦人, 第一卷第五號, 近事畫報社, pp.5-12; エリオットへの言及はp.10.	「ゼラジ, エリオットは, オーステン女史は『最も完き名人を意味して謂ふ, 技術家の中, 最も大いなる技術家である』と称揚して居る。」(p.10)
1906.10.01	明治39	夏目漱石	女子と文學者	女子時事新聞	第貳卷第貳號一號, p.1. (言論)	「ジュリエット」と表記されている
1906.10.15	明治39	夏目漱石	人工的感興	新潮	第五卷第四號, pp.1-3.	エリオットへの言及はp.1.
1908.5.29	明治41	大塚楠緒子	「空薫(そらだき)」第三十三回	東京朝日新聞	第七千八百十八號, p.7.	『東京朝日新聞』に明治四十一年四月二十七日から五月三十一日まで三十五回にわたり毎日連載された小説(『明治女流文學集』[筑摩書房, 1966.08.10]の「解題」, p.426); ヒロインが窺(のぞ)く本に, 「エリオット」がある; 『明治女流文學集』(1966.08.10)を見よ
1908.08.15	明治41	窪田空穂(柏樹下人)	昔の早稲田	文章世界	第三卷第十一號, pp.106-13. 113.	エリオットへの言及はp.113:「やがて試験の期となった。……ス井ントンの英文學は應用で, エリオットの評論の中, 最も難解な一節であった。」; 著者名は「柏樹下人」と記されている; 『窪田空穂全集 第五卷 小説・隨筆』(角川書店, 昭和41年5月15日発行), pp.212-19, 及び『明治文學全集 63: 佐々木信綱 兼子薫園 尾上柴舟 太田水穂 窪田空穂 若山牧水集』(筑摩書房, 昭和42年10月10日), pp.279-84に再録
1908.10.01	明治41	夏目漱石	無教育な文士と教養ある文士	英語青年	第貳拾卷第一號, p.22.	「之に對して同じく女作家George Eliotを見ると彼は始め小説家になろうと思ふ考へは少しもなく, 専ら哲學の研究に耽ったが中年にして小説に筆を染め終にあんな大作家になった……」
1909.02.01	明治42	夏目漱石	作家としての女子	女子文壇	第五年第貳号, pp.8-9.	エリオットへの言及はp.8.
1909.04.01	明治42	淺野和二郎	英文學研究書目	東亞之光	第四卷第四号, 發賣元 富山房, pp.113-20.	エリオットへの言及はp.118:「〔六十九〕エリオット(小説)。「シーンズ ^[マ] , オブ, クラアリアル, ライフ。」
1909.05.21	明治42	夏目漱石	メレディスの訃(一)	国民新聞	第六千七百七十六號, p.1. (國民文學)	エリオットへの言及は「メレディスの訃(一)」にあり
1909.05.22			メレディスの訃(二)		第六千七百七十七號, p.1. (國民文學)	
1909.10.01	明治42	永井荷風	我が思想の變遷	新潮	第拾壹卷第四號, pp.67-69.	「で最初には先づ多少英語の智識があつたから, ジョージ・エリオット ^[マ] とホーソンを讀んで見たが, 水沫集などで窺つた大陸文學の様な趣味が無いのと, 又一つには語學の力も十分でなかつたので期待した程の面白味は感ずる事が出来なかつた。」(p.67); 『雜艸園』(1949.05.25), 『明治文學全集73: 永井荷風』(1969.12.25)を見よ
1910.10.01	明治43	熊本謙二郎講義	ジョージ・エリオット短篇小説 ブラザー・ヂェイコップ講義〔第一回〕	英語青年	第貳拾四卷第壹號, pp.6-7.	
1910.10.15			BROTHER JACOB ^[マ] .〔第二回〕		第貳拾四卷第貳號第, p.32.. (卷の通しページ; 号のページ付けはなし)	
1910.11.01			BROTHER JACOB ^[マ] .〔第三回〕		第貳拾四卷第參號第, p.61.. (卷の通しページ; 号のページ付けはなし)	

1910.11.15			BROTHER JACOB [第四回]		第貳拾四卷第四號, p.86.. (巻の通しページ; 号のページ付けはなし)	
1910.12.01			BROTHER JACOB [第五回]		第貳拾四卷第五號, p.109.. (巻の通しページ; 号のページ付けはなし)	
1911.01.01	明治 44		BROTHER JACOB [第六回]		第貳拾四卷第七號, pp.162-63.. (巻の通しページ; 号のページ付けはなし)	
1911.01.15			BROTHER JACOB [第七回]		第貳拾四卷第八號, p.185.. (巻の通しページ; 号のページ付けはなし)	
1911.02.18	明治 44	簸川生	文豪トマス、ハーディがこと	學鐙	第十五年第二號, pp.3-14.	エリオットへの言及はp.6.
1912.12.01	大正 元		寫眞：英国の小説家 ジョージ・エリオットの邸宅	英語青年	第二十八卷第五號, p.129. (巻の通しページ, 号のページ付けはなし)	
1912.12.18	大正 元	溪々子	女流作家エリオットに就て	學鐙	第十六年第十二號, pp.13-18.	かなり詳しい紹介記事; 「溪々子」とは内田魯庵の筆名(『近代文学研究叢書 第三十一卷』訂正版[昭和女子大学, 1970.03.30] p.48)
1913.02.	大正 2	H. Watanabe (渡辺半次郎)	<i>Silas Marner: The Weaver of Raveloe</i>	英語教授	Vol.VI, No.2, pp.46-49.	『英語教授』は「日本における最初の英語教育の専門雑誌」で、「 <i>Silas Marner</i> の詳しい注釈」は「同誌の呼びものの一つとなった」(『英語教授(復刻版)別巻・解説編』[名著普及会, 1985] iii, 1, 139)
1913.04.			<i>Silas Marner: The Weaver of Raveloe</i> (II)		Vol.VI, No.3, pp.43-46.	
1913.06.			<i>Silas Marner: The Weaver of Raveloe</i> (III)		Vol.VI, No.4, pp.49-50.	
1913.10.			<i>Silas Marner: The Weaver of Raveloe</i> (IV)		Vol.VI, No.5, pp.47-51.	
1913.12.			<i>Silas Marner: The Weaver of Raveloe</i> (V)		Vol.VII, No.1, pp.31-35.	
1914.02.	大正 3		<i>Silas Marner: The Weaver of Raveloe</i> (VI)		Vol.VII, No.2, pp.42-46.	
1914.04.			<i>Silas Marner: The Weaver of Raveloe</i> (VII)		Vol.VII, No.3, pp.34-36.	
1915.10.	大正 4		<i>Silas Marner: The Weaver of Raveloe</i> (VIII)		Vol.VIII, No.5, pp.44-47.	
1913.03.15	大正 2		寫眞：ジョージ・エリオットの眞筆	英語青年	第二十八卷第十二號, p.363. (巻の通しページ, 号のページ付けはなし)	
1915.04.01	大正 4	ジョージ・エリオット	サイラス物語(其一～其三)	田中久子 (訳)	『新少女』第一卷第一號, 婦人之友社, pp.40-46.	挿絵付き, 挿絵画家名は不明; 「十九世紀の文豪の一人と謳はれた」, 英國の女流文学者ジョージ・エリオットの「傑作の一つとして評判の高い小説」サイラス・マーナーの「概略(あらまし)」を述べたもの(『新少女』第1卷第1号, p.40)
1915.05.01			サイラス物語(其四～其六)		『新少女』第一卷第二號(五月號), 婦人之友社, pp.50-56.	

1915.06.01			サイラス物語（其七，其八）		『新少女』第一卷第三號（六月號），婦人之友社，pp.47-51.	
1915.07.01			サイラス物語（其九，其十）		『新少女』第一卷第四號（七月號），婦人之友社，pp.52-58.	
1915.08.01			サイラス物語（其十一～其十四）		『新少女』第一卷第五號（八月號），婦人之友社，pp.36-46.	
1915.09.01			サイラス物語（其十五～其十七）		『新少女』第一卷第六號（九月號），婦人之友社，pp.62-68.	
1916.09.10	大正5	(薄田泣菫)	髭の有無	『大阪毎日新聞』（夕刊），コラム随筆「茶話」	第一万一千九百七號（9月10日付，ただし9月9日印刷発行）	「紫式部，清少納言，ジョージ・エリオット，クリスチナ・ロセツチ……成程ほんとはやわ，みんな髭があらへん。」；『茶話 下巻』（大阪毎日新聞社・東京日日新聞，1924.10.18）に再録
1917.01.02	大正6	松浦 一	「夏目漱石氏の一生」のなかの「大學教授時代」	『新小説』臨時号「文豪夏目漱石」	春陽堂，pp.38-42；エリオットへの言及はp.39：「其外先生は圖書館あたりに澤沢あつた書物の便利の為でもあつたらうが，サイラス・マーナーを我々に讀まして居られた」	のちに『漱石全集月報』第八号（1928.10.）に収録，そのときに「『文学論』の頃」というタイトルが付けられた。
1917.09.05	大正6	アーノルド・ベネット（日亭生譯）	小説に就いて	學鏡	第二十一年第十七號，pp.5-11.	
1917.10.05			小説に就いて（承前）		第二十一年第十九號，pp.1-8.	エリオットへの言及はp.4.
1918.06.01	大正7		寫眞：英國文士の署名	英語青年	第三十九卷第五號，p.129.（巻の通しページ，号のページ付けはなし）	W. Hepworth Dixon, Alexander Dyce, Annie B. Edwards, M. Betham Edwards, George Eliotの署名
1919.07.10	大正8	内村鑑三述，藤井武筆	「神の愛」	『聖書之研究』	第貳百貳拾八號，pp.305-309; エリオットへの言及はp.307.	サイラス・マーナーのことを間違つてダニエル・デロンダとして言及している。
1919.11.01	大正8	渡辺半次郎譯註	Judgements of Authors（「作家の評価」）（George Eliotの "Leaves from a Notebook" から）	英語青年	第四十二卷第參號，研究社，pp.75-76.（巻の通しページ；号のページ付けはなし）	エリオットの肖像画を一葉掲載
1919.11.01	大正8		寫眞：George Eliot	英語青年	第四十二卷第參號，研究社，p.75.（巻の通しページ；号のページ付けはなし）	"From a hitherto unpublished Pencil Drawing taken from life Lady Alama Tadema in 1877."
1919.11.15	大正8		寫眞：ジョージ・エリオット ^[ママ]	英語青年	第四十二卷第四號，研究社，p.99.（巻の通しページ；号のページ付けはなし）	写真には，エリオットの略伝が添えられている。
1919.11.15	大正8	風潭生	ジョージ・エリオット（一～四）	英語青年	第四十二卷第四號，研究社，p.107.（巻の通しページ；号のページ付けはなし）	風潭生とは平田禿木のこと
1919.12.01			ジョージ・エリオット（五，六）		第四十二卷第五號，研究社，p.139.（巻の通しページ；号のページ付けはなし）	
1919.12.15			ジョージ・エリオット（七～九）		第四十二卷第六號，研究社，p.171.（巻の通しページ；号のページ付けはなし）	「正誤」として，第四十二卷第四號，p.107に関する誤植の指摘が掲載されている。
1919.12.01	大正8		寫眞：ジョージ・エリオットの原稿の一部	英語青年	第四十二卷第五號，研究社，p.129.（巻の通しページ；号のページ付けはなし）	

1919.11.15	大正8	K. 生	発音の注意	英語青年	第四十二巻第四號, 研究社, p.107. (巻の通しページ; 号のページ付けはなし)	エリオットに関わる語 (作品名や人名) の発音が記されている。
1919.12.01	大正8	K. 生	固有名詞の注意	英語青年	第四十二巻第五號, 研究社, p.139. (巻の通しページ; 号のページ付けはなし)	エリオットに関わる語 (作品名や人名) の発音が記されている。
1921.12.01	大正10	豊田 實	To George Eliot (ソネット)	英語青年	第四十六巻第五號, p.114. (巻の通しページ; 号のページ付けはなし)	<i>Silas Marner: The Weaver of Raveloe</i> (研究社英米文学叢書, 1921.12.10) の "INTRODUCTION" の後に収録
1923.05.15	大正12	齋藤 静 譯	A Passage from the Mill on the Floss (ザ・ミル・オン・ザフロスの一節)	英語青年	第四十九巻第四號, pp.108-09. (巻の通しページ; 号のページ付けはなし)	音標文字transcriptionと和訳
1923.05.15	大正12	厨川白村	譯本『サイラス・マアナ』の序	英語青年	第四十九巻第四號, 研究社, p.120. (巻の通しページ; 号のページ付けはなし)	今泉浦治朗 (譯注), 『サイラス・マアナ』 (1923.05.0) の「序」と同一内容
1924.03.01	大正13	(阿部次郎, 芥川龍之介, 大村嘉代子, 與謝野晶子, 徳田秋聲, 千葉龜雄)	「家庭に於ける文藝書の選擇に就いて」	女性改造	三月號 (第3巻第3号), pp.10-26.	千葉の発言のなかでエリオットに言及: 「婦人の讀物としてはダンテの「神曲」などもよいですが, エリオットやディッケンス当たりの小説も推奨したいですね。」 (p.26)
1925.08.25	大正14	矢野 禾 積 (矢野峰人)	ボッカァチオと英文學	文藝	第十六年第八號及第九號, pp.75-89.	エリオットの詩 "How wise loved the King" ("How Lisa Loved the King" の誤記) に言及 (p.574); 『比較文學—考察と資料—』 (南雲堂, 1956.03.25) に, 表記及び内容の一部を変更の上, 再録
1925.10.10	大正14	内村鑑三	「日々の生涯」の中の「二十五日 (金) 雨」	聖書之研究	第三百三號, p.48.	1925.09.25の日記: 「まことに今日の日本に文芸は有っても文学はない。文学は思想である。思想なき文学者は文学者にあらずして文芸師である。講談師と異ならざる者である。詞を売る代わりに文字を売る者である。彼らの間にサッカー, ジッケンス, ジョージ・エリオットのごとき文学者は一人もない。」; 記載は『聖書之研究』復刻版第二十八巻 (聖書之研究復刻版刊行会, 1972.02.20) による; 『内村鑑三日記書簡全集3』 (教文館, 1965.02.03), 『内村鑑三全集34: 日記二』 (岩波書店, 1983.07.25) に再録
1926.02.20	大正15	エヌ, ケー, ドリンクウ オーター (内田魯庵)	英國現代小説家は 何を愛讀するか	GAKUTO (『學鐙』)	30th YEAR NO.2, pp.1-2.	ペンバートン (Max Pemberton) は「エリオットの "Romola" を推奨し (p.1), ジェローム (Jerome K. Jerome) は愛読する小説家としてエリオットをあげている (p.2)
*1926.04.	大正15	佐伯有三	名著梗概『サイラス・マアナ』	上級英語	4月創刊号	現物は未確認; 『近代日本英語・英米文学書誌 第2巻 雑誌』 (ゆまに書房, 1995.05.25), p.80を見よ
1926.04.20	大正15		ジョージ・エリオットの書留帳	GAKUTO (『學鐙』)	30th YEAR NO.4, pp.6-7.	
1926.07.01	大正15	細江逸記	Silas Marnerに現はれたる方言に就て (第一回)	英語青年	第五十五巻第七號, pp.19-20.	「Silas Marnerに現はれたる方言に就て」において発表された事柄のかなり多くの部分があるが, 『ジョージ・エリオットの作品に用ひられたる英國中部地方方言の研究』 (泰文堂, 1935.12.15) のなかに取り入れられた (「總序」, 『ジョージ・エリオットの作品に用ひられたる英國中部地方方言の研究』, p.7を参照)
1926.07.15		Silas Marnerに現はれたる方言に就て (第二回)		第五十五巻第八號, pp.24-25.		
1926.08.01		Silas Marnerに現はれたる方言に就て (第三回)		第五十五巻第九號, pp.22-23.		

1926.08.15		Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第四)	第五十五卷第十號, pp.23-24.	
1926.09.01		Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第五回)	第五十五卷第十一號, pp.15-16.	
1926.09.15		Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第六回)	第五十五卷第十二號, pp.16-17.	
1926.09.15		whomeの發音(石黒魯平様へ)	第五十五卷第十二號, p.17.	第45卷第9号掲載の「Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第三回)」に関する質問への解答
1926.10.01		Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第七回)	第五十六卷第一號, p.17.	
1926.10.15		Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第八回)	第五十六卷第二號, pp.17-18.	
1926.11.01		Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第九回)	第五十六卷第三號, p.17.	
1926.11.15		Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第十回)	第五十六卷第四號, p.15.	
1926.12.01		Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第十一回)	第五十六卷第五號, p.20.	
1926.12.01		whome (=home)の發音(齋藤静様へ)	第五十六卷第五號, p.21.	第55卷第12号掲載の「whomeの發音(石黒魯平様へ)」に関連して寄せられた指摘に対する返事
1926.12.15		Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第十二回)	第五十六卷第六號, p.17.	
1927.01.01	昭和 2	Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第十三回)	第五十六卷第七號, p.20.	
1927.01.15		Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第十四回)	第五十六卷第八號, p.23.	
1927.02.01		Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第十五回)	第五十六卷第九號, p.25.	
1927.03.01		Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第十六回)	第五十六卷第十一號号, p.22.	
1927.03.01	齋藤 静	[W]音の添加に就て(細江先生へ)	第五十六卷十一號, p.23.	第56卷第5号掲載の「whome (=home)の發音(齋藤静様へ)」に対する返事。ただし、この文書中にはエリオットへの言及はない。
1927.03.15	細江逸記	Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第十七回)	第五十六卷第十二號, p.18.	
1927.04.01		正誤	第五十七卷第一號, p.13.	第56卷第11号掲載の「Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第十六回)」の中の誤植の指摘

1927.04.01		Silas Marnerに現はれたる方言に就て（第十八回）	第五十七巻第一號, pp.17-18.	
1927.04.01		[W] 音の添加に就て（齋藤静様へ）	第五十七巻第二號, pp.21-22.	第56巻第11号掲載の「[W] 音の添加に就て（細江先生へ）」に対する返事
1927.05.01		Silas Marnerに現はれたる方言に就て（第十九回）	第五十七巻第三號, pp.22, 18.	p.22から逆にp.18の右欄に続く
1927.06.01		Silas Marnerに現はれたる方言に就て（第二十回）	第五十七巻第五號, p.20.	
1927.06.15		Silas Marnerに現はれたる方言に就て（第二十一回）	第五十七巻第六號, p.19.	
1927.07.01		Silas Marnerに現はれたる方言に就て（第二十二回）	第五十七巻第七號, p.24.	
1927.07.15		Silas Marnerに現はれたる方言に就て（第二十三回）	第五十七巻第八號, p.24.	
1927.08.01		Silas Marnerに現はれたる方言に就て（第二十四回）	第五十七巻第九號, pp.27-28.	
1927.08.15		Silas Marnerに現はれたる方言に就て（第二十五回）	第五十七巻第十號, p.23.	
1927.09.01		Silas Marnerに現はれたる方言に就て（第二十六回）	第五十七巻第十一號, p.18.	
1927.09.15		Silas Marnerに現はれたる方言に就て（第二十七回）	第五十七巻第十二號, pp.19-20.	
1927.10.01		Silas Marnerに現はれたる方言に就て（第二十八回）	第五十八巻第一號, p.22.	
1927.10.15		Silas Marnerに現はれたる方言に就て（第二十九回）	第五十八巻第二號, pp.19-20.	
1927.11.01		Silas Marnerに現はれたる方言に就て（第三十回）	第五十八巻第三號, pp.18-19.	
1927.11.15		Silas Marnerに現はれたる方言に就て（第三十一回）	第五十八巻第四號, p.23.	
1927.12.01		Silas Marnerに現はれたる方言に就て（第三十二回）	第五十八巻第五號, p.20.	
1927.12.15		Silas Marnerに現はれたる方言に就て（第三十三回）	第五十八巻第六號, p.19.	
1928.01.01	昭和3	Silas Marnerに現はれたる方言に就て（第三十四回）	第五十八巻第七號, p.19.	
1928.01.15		Silas Marnerに現はれたる方言に就て（第三十五回）	第五十八巻第八號, p.18.	

1928.01.15			prestoとinside (木村直行様外一氏へ)		第五十八卷第八號, p.31.	第57卷第12号掲載の「Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第廿七回)」に関する指摘への返事
1928.02.01			Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第卅六回)		第五十八卷第九號, p.23.	
1928.02.15			Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第卅七回)		第五十八卷第十號, p.24.	
1928.03.01			Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第卅八回)		第五十八卷第十一號, p.18.	
1928.03.15			Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第卅九回)		第五十八卷第十二號, p.15.	
1928.04.15			Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第四十回)		第五十九卷第二號, p.20.	
1928.05.01			Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第四十一回)		第五十九卷第三號, p.20.	
1928.05.15			Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第四十二回)		第五十九卷第四號, p.25.	
1928.06.01			Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第四十三回)		第五十九卷第五號, p.23.	
1928.06.15			Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第四十四回)		第五十九卷第六號, p.25.	
1928.07.01			Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第四十五回)		第五十九卷第七號, p.25.	
1928.07.15			Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第四十六回)		第五十九卷第八號, p.26.	
1928.08.01			Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第四十七回)		第五十九卷第九號, p.17.	
1928.08.15			Silas Marnerに現はれたる方言に就て(第四十八回)		第五十九卷第十號, p.22.	
1926.07.15	大正15	Minoru Toyoda (豊田 實)	More Studies in the Mental Development of George Eliot	英文學研究	帝大英文學會編, 第八卷第二號, pp.180-204.	
1926.11.20	大正15	Minoru Toyoda (豊田 實)	The Origin and Epochs of the English Novel	英文學研究	帝大英文學會編, 第八卷第三號, pp.344-58.	エリオットへの言及はpp.356-57, 358.